

## 『源氏物語』と「く漏らす」の発生について

百留康晴

はじめに

他動詞「漏らす」は自動詞「漏る」から派生したと考えられる。このことに関連し、拙論(二〇一五a)では「漏る」「漏らす」における用法上の自他対応の推移を明らかにし、拙論(二〇一五b)では複合動詞「動詞+漏らす」(以下「く漏らす」と総称する)における意味関係の変容とその要因を明らかにした。

拙論を成す過程で「く漏らす」という表現形成が中古において一般的でなく、『源氏物語』『紫式部日記』にのみ見られることが明らかになった。また『源氏物語』は同時代の他の仮名散文資料と比べ、本文中で「漏らす」を多用している。そのため「く漏らす」の形成は「漏らす」多用の延長線上にあったのではないかと考えた。また『源氏物語』に見られるのは「言ひ

漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」であり、これらは用法を変えつつも現在まで使用され続けている。このこととこれらが『源氏物語』で使用されたこととは無関係ではあるまい。以上のことから複合動詞「く漏らす」の形成と定着に関して『源氏物語』の作者が果たした役割の大きさが窺える。そこで本論では『源氏物語』における「漏らす」の使用拡大、中古における自動詞「漏る」が形成する複合動詞との違いという観点から『源氏物語』の作者が当該表現を生み出した蓋然性について検討することを目的とする。

本論は成稿の背景から拙論(二〇一五ab)と内容的に重なる部分がある。また杉村(二〇〇七)・西田(一九八九)(一九九〇)には多くのものを負っているが、すでに拙論においてその内容に言及しているため、本論では重複を避け、言及を割愛する。

二 『源氏物語』における「漏らす」について

表一に中古における「漏る」「漏らす」の用例数を示した。自動詞「漏る」(四段活用)が多くの資料で幅広く使用が認められる一方、「漏らす」は作り物語を中心に使用が認められる。『源氏物語』における用例数はその分量の多さを考慮しても突出して多く、極めて特徴的である<sup>1)</sup>。

表一 中古における「漏る」「漏らす」の用例数

	漏る (四)	漏る (下二)	漏らす
伊勢物語			1
平中物語	1		
蜻蛉日記	5		
宇津保物語	5	2	3
大和物語	4		
枕草子	1		
源氏物語	12	2	49
夜の寝覚	5		8
浜松中納言物語	3		1
狭衣物語	8		7
栄花物語	5		2
計	49	4	71

そこで意味用法の面からさらに『源氏物語』における「漏らす」について考えてみたい。中古における「漏らす」の意味用法は以下の①～④に整理される。

① 「雨・水」などの液体が何らかの遮蔽物を通過し、その外に現れるようにする。

② 人が内に抱える「内容」が言葉等によって外に表され、他者に知覚されるようにする。

③ 人の有する「気持ち」「感情」が態度・表情等によって外に表され、他者に知覚されるようにする。

④ 作者が内に抱える「内容」を文字によって物語に表さず、他者に知覚されないようにする。

表二 中古における「漏らす」の用法別用例数

	①	②	③	④	計
伊勢物語	1				1
宇津保物語		3			3
源氏物語		36	9	4	49
夜の寝覚		5	3		8
浜松中納言物語		1			1
狭衣物語	1	3		3	7
栄花物語		1	1		2
計	2	49	13	7	71

表二に用法別用例数を示した。用例数で見ると①での用例が最も少なく、②での用例が最も多く、③④での用例がそれに続く。③④の用法は源氏物語以前成立の資料では見られない。また②③④の用法が認められる『源氏物語』の「漏らす」の用例において特に用例数の多いのは②の用法であり、②の用法全体の用例数を押し上げている。

以下各用法について簡単に見ていく。①の用法は自動詞「漏る」の用法をもとにそれを他動詞「漏らす」に当てはめたものであると考えられる。この意味用法は中古の散文資料では和歌の中で少数の例が見出せるにすぎず、その用法も固定的で使用に広がりは見出せない。用例を1に示す。1は歌の用例で「結ぶ」が「水」の縁語である「掬ぶ」の掛詞となっており、「縁を結ぶ」と「水をすくう（掬ぶ）」ことが掛けられている。「水漏らさじ」は比喩的に相手の女性との強い絆を保とうとする姿勢を表現している。

1むかし、色好みなりける女、出でていにければ、な  
どてかくあふごかたみにににけん水もらさじと結  
びしものを  
伊勢物語 二八段

②の用法は早くも『宇津保物語』に用例が見られる。この用法は『源氏物語』を含め、作り物語に多くの用例が認められ、禁止や打消意志を表わす文で使用され

ることが多い。『源氏物語』の用例を2に示す。2は夕顔の家を訪れた源氏があくる朝、夕顔をその屋敷近くの「なにがしの院」という人が住んでいない荒れた様子の屋敷に連れて行く。そこで屋敷を管理する預かりが源氏に御供がないのは不便があるだろうと伝えるのに対して源氏の言葉に現れた用例である。源氏は預かりに特別に人が来ないような隠れ家を求めたのだ。他の人に知らせるなど口止めをする。

2「殊更に、人來まじき隠れ家求めたるなり。更に、  
心よりほかに漏らすな」と、（源氏は）口がためさ  
せ給ふ。  
源氏物語 夕顔

次に③の用法について述べる。3、4に用例を示す。3は『源氏物語』における夕霧に語る朱雀院のことはの中の場合である。桐壺帝には源氏と冷泉帝の行く末を頼まれていた。しかし天皇となった後は立場上限界があり、朧月夜をめぐる事件の時にかばうことができなかつた。そのことでは源氏に恨まれただろうと思うのだが、長年その恨んでいる様子を源氏は見せないと言っている。また4は『夜の寝覚』の用例である。今では現世での望みを捨て、子どもたちの世話に明け暮れている寝覚上は、かつて愛した内大臣をかりそめの、自分とは関係のない人と思ひ、心の内を見せて恨みに思う様子は決して見せないという用例である。

3 「心置かれたてまつることもありけん」と思ふを、年頃、事にふれて、その恨み残したまへるけしきをなん、漏らし給はぬ。 源氏物語 若菜上

4 かりそめの、よその物に思ひはなち、うちとけてうらみ顔なる気色、ゆめにも洩らさず、 夜の寢寛

中古の「漏らす」における③の用法は人の内面にあらものが外に現れるという点で前述の②の用法と共通性を有する。しかし、言葉が介在するかしないかという点から両者の用法には線引きができる。また②が具体的な言動を伴うのに対し、③は表情、態度のみから相手の内面を探るという点でより繊細な読み取りを必要とする。③の用法は中世以降見られないことから、中古における貴族社会を舞台にした『源氏物語』の中で特に発達した用法ではないかと考えられる。

④の用法は「内容」を他者に知覚されないようにする」という点で②③とは正反対の内容を表わすように見える。5に用例を示す。源氏は夕霧の元服を行つたが、すぐに四位にはせず、大学に入学させ勉学をさせることにする。大学入学の際、字を付ける式が行われた後、源氏は博士や詩文に堪能なもの、上達部、殿上人で詩作が出来るものをその場に residual し、詩を作らせた。5はその詩の出来栄えやその場にいた人々の様子を描写した部分の用例である。終わりにいわゆる草子地の部分があり、女がよく知らないことを語るのは憎

らしいことだと人が言い、嫌なことであるので「漏らした」、つまり、それ以上書かなかつたと記されている。

5 「唐土にも、もて渡り伝へまほしげなる、世の文どもなり」となん、その頃、世に愛でゆすりける。おとこの御をば、さらなり。親めき、あはれなる事さへすぐれたるを、涙おとして、誦しさわざしかど、「女の、え知らぬことまねおは、憎きことを」と、うたてあれば、漏らしつ。 源氏物語 乙女

この用法はいわゆる草子地と呼ばれる部分にのみ現れる。その際、作者を主語とし、前段を受け、さらに描写するのは差支えがあるので書かなかつたと述べる形式を取っている。同様の用例は中古の仮名散文において『源氏物語』『狭衣物語』にしか見られない。以下の6は『狭衣物語』の用例である。6の用例も草子地で使用され、『源氏物語』での述べ方が踏襲されている。『狭衣物語』は『源氏物語』の影響を強く受けているとされる。そこで④の用法での「漏らす」の使用も『源氏物語』の表現を継承しているのではないかと考える。

6 その夜の事ども書き続けまほしけれど、中中なれば、漏らしつ。 狭衣物語

さて中古仮名散文資料において「漏らす」に①～④の用法があることを見た。次に各用法間の派生関係を考えてみたい。まず①の用法は用例が二例しか認められず、その全てが和歌に見られる用例である。このことから①の用法は和歌表現を基盤とし、「漏る」の表わす内容を他動詞的に表現するために生まれた用法であるうと考える。一方②の用法は自分の内に存在する秘密や内緒事などの内容が外に表わされることを表わしている。①の用法と何らかの接点を持ちつつこの用法が派生したと考えると②の用法は和歌表現で「漏る」が有していた「液体が流れ出すイメージ」を自分の抱える秘密、内緒事を人に知らせるといふ世俗での行為に重ね合わせることで成立したのではないかと考える。『源氏物語』成立以前の和歌資料では『古今和歌集』に二例、『後撰和歌集』に一例、以下の用例が見出せる。

- 7 枕よりまた知る人もなき恋を涙堰きあへずもらしつ  
るかな 古今和歌集 六七〇
- 8 犬上の鳥籠の山なる名取川いさと答へよわが名もら  
すな 古今和歌集 一一〇八
- 9 思ひわび君がつらさに立ち寄らば雨も人目ももらさ  
ざらなむ 後撰和歌集 九五三

これらの用例において「漏らす」対象は「相手を思

う気持ち」や「相手を思う自分の存在」であると考えられる。しかし同時に歌の中には「涙」「名取川」「雨」という「水の流れ」を想起させる言葉がそれぞれ詠み込まれている。このことからこれらの歌の中では「液体が流れ出すイメージ」が「相手への気持ち、そのような気持ちを抱く自分が外に現れること」に重ね合わせられていることが分る。このことから和歌表現における「漏らす」では「自分の気持ちの外に現れること」と「液体が流れ出すイメージ」を重ね合わせる用法を發達させたことが窺える。

中古仮名散文における「漏らす」の②の用法では外に現れるのは言葉であり、自分の抱える内容であった。しかし、ある内容を外に表わすことを問題にしている点では和歌表現における「漏らす」の用法と共通性が見出せる。さらに表情、態度から主体の感情があらわになることを表わしている③の用法についても主体の感情が外に表わされるという点が和歌表現における「漏らす」の用法と共通する。

以上から「漏らす」を用いた「自分の気持ちの外に現れること」と「液体が流れ出すイメージ」とを重ね合わせる表現が和歌において生まれ、そのことが②③の用法が派生する環境を整えたと考える。和歌における7～9のような用例は言わば「漏らす」の①の用法と②③の用法とをつなぐ存在であると考えられる。なお和歌では「漏らす」の表現内容に二つのイメージが

二重に重ねられるのに対し、散文ではそのようなことは無い。これについてはそれぞれの媒体としての性格に起因する相違であると考ええる。

小田（一九八七）は勅撰集において「漏らす」が恋歌で多く用いられていることを指摘し、「その意味でこの語は恋の諸相を描き分けた源氏物語的詞といえよう」としている。②③の用法が共に『源氏物語』の「漏らす」に多く見られるのは「源氏物語」がその成立に際して巧みに和歌表現を取り込んだ結果であり、「漏らす」の表現性や『源氏物語』の物語性をより豊かにすることを意図したことによるものであるうと考ええる。

最後に④の用法について考える。なぜある内容をそれ以上書かないことが「漏らす」と表現されるのか。それは④の用法においては「内容」を「表わすべき場」が予め設定され、その「場」からその外へ「内容」を出すことがイメージされたためであると考ええる。④と②の用法を比較すると両方ともある場所を起点とし、「内容」をその外に出すという点は変わらない。しかし、その起点が②では「内容」が位置する「人物」であるのに対し、④では「内容」を「書くべき場所」となっていると考えられる。「書くべき場所」からその「内容」を外に出せば内容は書かれないことになる。②④の用法が正反対の内容を示すのは両者における起点の相違が原因であると考ええる。

### 三『源氏物語』における「漏らす」について

「漏らす」は『源氏物語』『紫式部日記』にしか用例が認められない。前述した『源氏物語』での「漏らす」の多用、用法の拡大を併せ考えると『源氏物語』の作者が独自の表現を模索する過程で「漏らす」の形成がなされたという蓋然性が高いように思われる。そこで本節では中古の散文資料において「漏る」「漏らす」の複合動詞形成の傾向を比較することにより、さらに考察を深めていきたい。

まず「漏らす」の用法について簡単に示す。10は方違えで紀伊守の家を訪れた源氏が、邸内を眺めながらめぐっていると侍女たちがひそひそと自分について噂話をしているのを聞くとという場面の例である。ここでの「言ひ漏らす」は「人が自分の知っていることを言い、それを外に出す」という意図的な行為を表わしていると考えられる。

11は秘密にされていた髭黒と玉鬘の交際について自然に人が興味深いこととして語り伝え、聞いた人がそれを周囲に広めているという例である。この例での「聞き漏らす」は「人が聞いて、その聞いた内容を外に出す」という意図的な行為を表わしていると考えられる。

12は宇治八宮の逝去後、娘の大君、中君の心を慰めるため、薫も匂宮も折々に便りをよこすという場面の例である。この例は草子地に見られ、その内容につい

て煩わしく、何でもないうなことが書いてあるからいつものように書かなかったのでしょうかと作者が述べている例である。この「書き漏らす」は「その内容を書くことはせず除いた」ことを表わしている。

10 「かやうのついでにも、人の言ひもらさむを、聞きつけたらむ時」など、(源氏は) おほえ給ふ。

源氏物語 帚木

11 かう忍び給ふ御中らひ(髭黒と玉鬘の關係)のことなれど、おのずから、人の、をかしきことに語り伝へつつ、次に聞きもらしつ、ありがたき世語り

源氏物語 眞木柱

12 中納言殿よりも、宮よりも、折過ぐさず、とぶらひ聞え給ふ。(その文は) うるさく、何となきこと多かるやうなれば、例の、書きもらしたるなめり。

源氏物語 椎本

他に『紫式部日記』に「御覧しも漏らす」が見られる。13は消息文の結びの体裁で綴られた部分の例で読めないほど乱筆のところや脱字もございましょうがそれについてはお見逃しくださいという内容である。この例の「御覧しも漏らす」は「見てもその内容を内にとどめないでください」ということを表わしている。

13 え読み侍らぬところどころ、文字おとしぞ侍らん。それは、なにかは、御覧しも漏らさせ給へかし。

紫式部日記

以上、「源氏物語」における「言ひ漏らす」「書き漏らす」「聞き漏らす」、「紫式部日記」における「御覧しも漏らす」の用法を見た。「言ひ漏らす」「聞き漏らす」の意味には動詞「漏らす」の②の意味が、「書き漏らす」「御覧しも漏らす」の意味には「漏らす」の④の意味がそれぞれ反映されていることが分る。②④は「源氏物語」で多用されている用法、独自に作られた用法である。このことからこれらの表現が源氏物語の作者が「漏らす」を使用し、物語を作る過程でごく自然に生まれたことが窺える。

そこで次に中古における「漏る」「漏らす」の複合動詞形成の傾向を比較することでさらに考察を進める。表三、表四に中古和文における「漏る」「漏らす」が形成する複合動詞を示した。

表三 中古における「漏り〜」「漏れ〜」

漏り濡る	蜻蛉1・源氏1
漏り添ふ	宇津保1
漏り過ぐ	大和1
漏り優る	大和2
漏り来	枕1・源氏2・更級1
漏り出づ	枕1・源氏12・狭衣6 夜寝覚2・栄花2
漏り聞く	源氏20・夜寝覚10 浜松1・狭衣1・栄花2
漏り聞こゆ	源氏6・夜寝覚2 狭衣1・栄花16
漏り見る	源氏1
漏り入る	狭衣1
漏り患ふ	狭衣2
漏れ出づ	夜寝覚2
漏れ聞こゆ	狭衣1

表四 中古における「漏らし」―「漏らす」

漏らし憂ふ	源氏1
漏らし落とす	源氏1
漏らし聞し召す	源氏3
漏らし奏す	源氏4
漏らし伝ふ	源氏1
漏らしとどむ	源氏1
漏らし聞かす	夜寝覚2
漏らし渡る	夜寝覚1
漏らし出づ	狭衣1
言ひ漏らす	源氏3
書き漏らす	源氏1
聞き漏らす	源氏2
御覧じも漏らす	紫式部1

「漏る」を用いた複合動詞は『源氏物語』成立以前の資料にも用例が確認でき、複数の資料で用例が確認できるものが多い。しかし、「漏らす」を用いた複合動詞は用例が確認できる範囲が『源氏物語』『紫式部日記』『夜の寝覚』『狭衣物語』のみに留まっている。以上から両者を比較すると中古の複合動詞形成においては「漏る」による複合動詞形成のほうがより一般的であり、「漏らす」による複合動詞形成は『源氏物語』の作者による創意、またはその影響を受けた人物による模倣に限定されることが窺える。

次に用法について見ていきたい。「漏る」は中古の散文資料では『大和物語』『蜻蛉日記』『宇津保物語』などから用例が見られ、「雨」「露」「月影」などを主語として用いられた。以下に示した「漏り来」「漏り過ぐ」「漏り添ふ」「漏り濡る」「漏りまさる」が「雨」「涙」「月影」などを主語としているのは「漏る」の用

法が反映されているためである。

14 荒れたる家の蓬ふかく、葎這ひたる庭に、月のくまなくあかくすみのほりて見ゆる。また、さやうの荒れたる板間より漏り来る月。荒うはあらぬ風の音。

枕草子 一本二六段

15 しぐれのみ降る山里の木の下は居る人からやもりすぎぬらむ

大和物語 三二段

16 中納言殿より

夏衣薄くはいつも見ゆれども涙漏りそふころにもあるかな

もあるかな

めづらしげなき御心を、あやしくなど聞え給へり。

宇津保物語 藤原の君

17 六月ばかりかけて、雨いたう降りたるに、たれも降りこめられたるなるべし。こなた（作者の居る所）には、あやしきところなれば、漏り濡るるさはぎをするに、

蜻蛉日記 上

18 男、縁にのぼりて居ぬ。「などか物のたまはぬ。雨のわりなく侍りつれば、やむまではかくてなむ」といへば、「大路よりはもりまさりてなむ、ここは中々」といらへけり。

大和物語 一七三段

また『源氏物語』の「漏る」には「内容」「気持ち」を主語とする新しい用法が出現した。そのことが「漏る」と「聞く」「聞こゆ」とを結び付け、「漏り聞く」



「漏り聞こゆ」を形成することを可能にしたと考えられる。「漏り出づ」も多くの資料で用例が確認できる。「漏り出づ」は「漏る」の多用な用法を反映し、「内緒事」「気持ち」「浮き名」「袖口」「涙」「月影」などを主語とする用例が確認できる。他に「漏り見る」は「人の姿」、「漏り入る」は「月影」、「漏り患ふ」は「雨」を主語とする。「漏れ出づ」「漏れ聞こゆ」は「漏り出づ」「漏り聞こゆ」の用法と同じである。

一方、「漏らす」が前接して形成する複合動詞は「内容」「気持ち」「涙」を目的語とする。これも「漏らす」の用法を反映している。中でも「内容」を目的語とする「漏らし」の使用数が多い。以下19、20、21に示した「漏らし奏す」「漏らし聞こし召す」はそのような例である。これらは「漏らす」の②の用法に基づいたものであり、「言ふ」「聞く」の尊敬語と結び付いた例である。「漏らし奏す」と異なり、「漏らし聞こし召す」は二つの動詞の主語が異なっている。しかし『夜の寝覚』にも「漏らし聞かす」の用例が認められ、このことは『源氏物語』の「漏らし聞こし召す」が「まとまりの表現として受容されたことを示している。他に「漏らし伝ふ」も同じく「内容」を目的語とする。

19 又うへ（冷泉帝）のかくおほしめし悩めるを見たてまつり給ふもかたじけなきに「たれ、かかる事をも

らし奏しけむ」と（源氏は）あやしう思さる。

源氏物語 薄雲

20 「そのかみより「いかになりにけん」と尋ね思う給へしさまは何のついでにか侍りけんうれへに堪へず（内大臣が源氏に）もらし聞し召させし心ちなんし侍る。

源氏物語 行幸

21 「聞きやつけ給はん」のあらましごととにだによろづもわすれておぼえつるに日をだにへずまづもらし聞かせ給つらん宮の御心のかく思しかまふるとは心えながらなをめぐらかに憂くうとましきに 夜の寝覚

また以下に示した22は「気持ち」、23、24は「涙」を目的語とする例である。25は文のやりとりを通して互いの心情を相手に伝えていくという例で、後接する「渡る」は意味が抽象化し、行為の継続を表わしている。26はこれらとは異なり、「漏らす」の④の意味が反映された例である。「かやうのくだくだしきこと」とは源氏と夕顔との間にあった出来事を指す。それを書くことはせずにとどめていたが、見知っている人も源氏のことをほめてばかりいるのは作りごとのようだと思う人もおありなので書いたと述べている。

22 明石の入道行ひ勤めたるさまいみじう思ひすましたるを、ただ、このむすめ一人をもてわづらひたる気色、いとかたはらいたきまで時々（源氏に）もらし

憂へきこゆ。

源氏物語 明石

23 涙を漏らしおとしても、いと、恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、「『つらきをも、思ひ知りけり』と、見えんは、わりなく苦しき物」と、思ひたりしかば、

源氏物語 帚木

24 大方は身をや投げまし見るからになぐさの濱も袖ぬらしけり

とて、はては例の忍び難げに漏らし出給涙のけしきを、又かき尽し心づきなう思しなられて 狭衣物語

25 かくのみ心のかぎりあらねど、もらしわたり給に、

(対の君は)、心弱く思ふにはあらで、月日をかぞへつつこの御ありさまの心ひとつに思ひやるべきかたなくわびしきを

夜の寢覚

26 かやうのくだくだしきことはあながちにかくろへ忍び給ひしものとほしくてみな漏らしとどめたるを、「などか帝の御子ならむからに見ん人さへかたほならず、ものほめがちなる」とつくりごどめきてとりなす人ものし給ひければなむ。

源氏物語 夕顔

以上のことから中古においては「漏る」を使用した複合動詞形成のほうが一般的で、「漏らす」を使用した複合動詞形成は特殊であるという傾向が明らかになった。このことには本来「漏らす」が「漏る」から派生したものであり、自動詞によるナル型表現を好む日本語に受け入れられたという言語的背景も存在すると考

えられる。「漏らす」を使用した複合動詞形成は『源氏物語』とその影響を受けて成立した物語にのみ見られる。また用法面でも『源氏物語』以降多用された「漏らす」の②の用法や新しい用法である③④の用法を反映している。これらのことは『源氏物語』の作者が「漏らす」を用いた表現を模索する中で「漏らす」による複合動詞形成がなされたという蓋然性の高さを窺わせる。

#### 四 まとめ

本論では『源氏物語』における「漏らす」の使用拡大、中古における「漏る」「漏らす」による複合動詞形成における傾向の違いから『源氏物語』の作者が「漏らす」を生み出した蓋然性を検討した。その結果、用法面、複合動詞形成の面から『源氏物語』の作者の独自性が明らかになり、『源氏物語』の作者が「漏らす」を生み出した蓋然性は高いと判断される。本廣(二〇〇八)は『源氏物語』が「もの」形容詞の発展に果たした役割を論じている。本論で見たように動詞の用法の拡大、複合動詞形成においても『源氏物語』の果たした役割が窺える。その解明を今後の課題としたい。

注

1 拙論(二〇一五 a b)では『源氏物語』における

「漏らす」の用例数を『源氏物語大成索引篇』中央公論社、『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』勉誠社の見出し語に従い、五七とした。しかし、その内七例は「漏らす」に「聞こし召す」(三例)、「うれふ」「伝ふ」「とどむ」「落とす」(各一例)が後接する例、一例は異本の該当箇所異なる語句が見られる例である。そこで本論ではこれらを「漏らす」の例から除き、用例数を四九とした。「漏らす」に他の動詞が後接する例は複合動詞としない基準が明確ではないため、形の上からすべて複合動詞とする。同様に「漏る(四段)」の用例数についても「漏る」に「濡る」が後接する例が含まれていたため用例数を二二へ修正し、「漏り濡る」を複合動詞とする。

2 拙論(二〇一五 a b)。

3 中古語では複合動詞に係助詞が介入することがある。

「御覧じも漏らす」は「御覧じ漏らす」に係助詞「も」が介入した例と考える。

参考文献

小田剛(二九八七)「式子内親王の特徴的な詞(下)――

「もらす」「黄昏」「碎く」「葉風」「うた、ね」「川船」――『滋賀大國文』二五

杉村泰(二〇〇七)「複合動詞「――忘れる」,「――落とす」,「――漏らす」の用法」『日語学習と研究』(中国

日語教学研究会、对外経済貿易大学)二〇〇六年第四期(総一二七期)

西田隆政(一九八九)「和歌解釈と語義展開――動詞「漏る」をめぐる――」『解釈』三五―八

西田隆政(一九九〇)「動詞「漏る」の用法展開をめぐる――抽象表現から具体表現へ――」『文学史研究』三一

百留康晴(二〇一五 a)「有対他動詞「漏らす」の派生について」『国語教育論叢』二四

百留康晴(二〇一五 b)「アスペクト複合動詞「漏らす」の歴史的検討」『島根大学教育学部紀要』四九

本廣陽子(二〇〇八)「「もの」形容詞の意味と用法の発展――源氏物語の果たした役割――」『国語国文』七七―六

調査に用いた資料

伊勢物語・大和物語・平中物語・和泉式部日記・落窪物語・源氏物語・枕草子・堤中納言物語・浜松中納言物語・狭衣物語・夜の寝覚・栄花物語(以上『日本古典文学大系』土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記(以上岩波『新日本古典文学大系』)

・宇津保物語(室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲員直子・志甫由紀恵・中村一夫共編『うつほ物語の総合研究1 本文編』勉誠出版)

(島根大学教育学部准教授)